よみがえる文化財

□■29

美術品修復の現場から

アーカイブは「恋心」

吉備国際大助教授
小西　伸彦氏

吉備国際大学文化財総合研究センターは文化財の病院です。文化財という患者を診ます。文化財は自分からどこが痛いとか、どこが悪いとか言ってくれません。そこで、患者のことを調べることから始めます。来歴、作品がつくられた背景、作者の調査・研究です。次に検査を行い治療方法を検討し、いよいよ修復です。その検査、修復を記録するのが修復現場でのアーカイブです。

美術品は世界中の博物館に貸し出されます。昨年、『ゴッホ展』が東京、京都、名古屋を巡回しました。ゴッホ展には学芸員のほか、西洋美術修復家がクーリエとして帯同しました。クーリエとは作品の健康管理をする医師です。大原秀之教授が日本滞在中のゴッホの主治医を務めました。

患者のカルテを持って作業に臨めば、クーリエは的確な判断ができます。修復は時の最高技術で行いますが、将来、より優れた修復技術が発見された時に備えて、劣化が進行しない措置にとどめたり、いつでも修復前の状態に戻せる可逆措置をとります。修復情報や内容を正しくカルテに残すことは、学芸員やクーリエに正しい判断を与える材料になるのです。

◆正しい知識、理解が大前提

文化財は出土品から美術品まで、形状が違えば、素材や制作方法も異なります。建築物や遺跡、遺構も文化財です。紙や絹に描かれた日本画や版画、水彩画などは光に弱く、博物館では照度を落として展示します。撮影する時も光源や強さに注意します。

版画家・棟方志功は、描き終えた風景に向かって手を合わせて感謝したといいます。アーカイブの現場でも、文化財に敬意を表し、緊張感を持たなくてはなりません。文化財のことを学び、正しく理解した上で取り組むことが基本です。恋心を寄せる相手を知りたいと思うのと同じことです。ここをおろそかにしては血の通ったアーカイブはできません。

東洋美術修復家・馬場秀雄教授は、「物を言わない文化財に惚れながら修復します。しかし、文化財のことがすべて分かっていないうちは修復に手をつけません」と言います。アーカイブの基本も対象を十二分に知ることから始まります。アーカイブには撮影技術とフォトグラファーのセンス、学芸員の知識と所作が必要です。

◆地道に、いたわりの心で

文化財は高齢者と同じです。急激な環境の変化に弱く、いたわりの心で接してやらないと、たちまち病気をこじらせてしまいます。目線を低くして辛抱強く取り組まねばなりません。老人の記録をとる地道な作業の繰り返しです。派手さも華やかさもありません。しかし、人が残してきた文化財という遺産に接しているうちに、人として失ってはならないモノが見えてきます。文化財の修復、そしてアーカイブは、人間の原点を見つめ直す大いなるきっかけでもあると確信しています。

◆戸籍謄本とカルテ

修復データは一体どんなことに役立つのでしょう？　博物館には、所蔵する全作品の情報が記録された「作品台帳」があります。戸籍謄本のようなものです。名前、制作年代、サイズ、技法のほか、「修復歴」、つまり病歴欄もあります。

慎重に組み立てられる「赤韋威鎧（ぜんいこうおどしよろい）」。約束事に従って複雑な方法で組んでいくのは加古一朗学芸員。光を回し、撮影の段取りを始めるのは、組み立てが終わってから

美術品撮影現場で、スタジオ用ストロボを使って撮影準備。大型カメラに露出計を向けて測光し、レンズの絞り値を決めている。鎧は白の背景紙の上で組み立て、ストロボの光源や周囲の景色などが写り込まないよう、何度も光の位置を変える。そのためシャッターを切るまでに時間がかかり、一日に２領しか撮れないこともある。しかし、準備が整えば実際の撮影はほんの一瞬。右上の黒いボックスがストロボで、左側と、右後方にも天井に向けた光源があり、周囲は白い板で囲って光が回るように工夫している。撮影者は自分自身が写り込まないよう黒装束をまとう
＝高梁市歴史美術館で

きび談語

ゴールデンウイークが終わりましたが、どうも過ごされましたか。私は内臓脂肪を減らすべく、鏡野町上斎原にある温水プールで、ひざ痛でも負担の少ない水中ウオーキングを楽しみました▲鳥取と県境を接する上斎原地区までの風景は、気持ちの良いものでした。ヤマツツジやヤマフジが美しく咲き、道路沿いの新緑も鮮やか。運転しながら気分をリフレッシュできました。今年はサクラをはじめ、春の花々が特に見事だと感じます▲里山のあちこちに咲く数多くのヤマザクラも見ましたが、同地区にある県立森林公園では今、カラマツやブナの林が一斉に芽吹き、小鳥たちのさえずりがこだましているようです。弁当を持ってハイキングもいいですね。

【楢山佑二】